

文化遺産としてのものづくり — マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識

飯田 卓いただ たく

民博 先端人類科学研究部

このコーナーではこれまで、芸能や儀礼といった無形文化遺産をとりあげてきた。この先しばらくは、ものづくりや言語、食など、スペクタクルや舞台に仕立てにくいタイプの遺産をとりあげたい。

霧の森のザフィマニリ人

この数年間、マダガスカル山間部で製作されている木彫りを集中的に調査してきた。ザフィマニリという人たちが作るこの木彫りについては、二〇一三年春の特別展「マダガスカル霧の森のくらし」や『月刊みんぱく』の特集などで紹介した。今回は、特別展開幕後にザフィマニリの人たちが直面する問題を報告しよう。たゆまぬ実践をとおしてうけ継がれる無形文化遺産と、そうした実践を可能にする林産資源のバランスについて

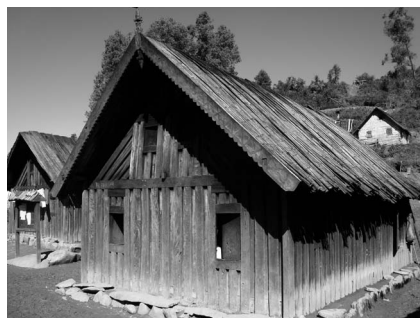
考えたい。

この木彫り技術は、交通の便が悪く生活物資が不足するなかで培われてきた。近年増えてきた「よそ者」たちがその価値を見だし、ユネスコが無形文化遺産として認定したが（二〇〇八年）、担い手たちはあまり認定を意識していない。むしろ、日常で当たりまえにおこなわれてきたことが珍しがられて、戸惑っているようにもみえる。いっぽうで、一部の村には観光客が大勢訪れるようになり、才知に長けた人たちはさまざま

な商売を考案している。

時計を一五年まき戻す

二〇一三年七月に、特別展開幕後はじめて、ザフィマニリの村を訪れた。来場者が書いた手紙の一部を、ザフィマニリの人たちに届けて紹介するのが目的だった。特別展の成功を報告し、喜びあうなかで、気になる話を耳にした。村のなかに建つ土壁作りの家屋が六〇軒ほど壊されて、代わりに木造家屋が建てられるという。ここでいう木造家屋は、マダガスカルのみならず



ザフィマニリの「伝統的」家屋

ユニークな様式で、ザフィマニリ伝統のシンボルとされるものだ。かつてはマダガスカル中央高地部で広くみられたが、現在

ではザフィマニリ人が限られた地域で伝えるのみである。日本でいえば、各地の茅葺き民家建築のようなものだろうか。

土壁家屋が壊されて木造家屋が新築されることは、ある意味で景観復元につながるだろう。特別展の準備のとき、吉本忍氏（現在、民博名誉教授）の調査団が一九九八年に現地で撮ったビデオを見たところ、木造家屋の割合が今よりもっと多かったことに強い印象を受けた。木造家屋を増やせば、村の景観を一五年前に近づけることができ



新築中の家屋（2012年）

るだろう。その意味で、家屋新築の助成を歓迎する人たちは少なからずいる。

しかし、問題はそれほど単純ではない。木造家屋の新築を間接的に助成するフランスのスポンサーは、ザフィマニリの村々で不要になった木製窓を大量に買いつけ、その一部を七二点もの現代芸術作品に仕立てあげて展示会を開いた。今回の新築助成には、その収益の一部が充てられたのだという。

無形文化遺産である木彫り

技術の結晶ともいえる作品を、まったく異なる芸術表現に仕立てなおすのは、ザフィマニリの作り手に対する冒涇だと個人的に思う。しかしこの点は、展示会の概要を詳しく知ったうえで評価したい。さしあたり問題だと思うのは、短期間に多数の家屋が建てられ、貴重な木材が伐りつくされてしまうことだ。

後でわかったところによると、六〇軒の新築というのは大げさで、じっさいには三八軒の新築と一〇軒の補修が申請されただけだった。しかし、補修が終わった一〇軒と新築中の一〇軒を二〇一四年夏に調べたところ、必ずしも理想的な樹種が建材に使われているとはいえなかった。適当な樹種が使われる場合でも、樹齢が古くないために、昔の家ほど長持ちしないだろうという声がかかれた。

形の過度な重視

人びとの日常的ないとなみを

とおして伝わる無形の遺産は、形式や形状の保存だけによって保護することはできない。それどころか、形式や形状だけを保存しようとすると、逆に無形なもの継承が危うくなってしまふことすらある。ザフィマニリの事例は、まさしくそのことを示している。ザフィマニリの木彫り技術を支えるのは、その技術を伝える人たち、そして、木彫りの素材として用いられる木材だ。今回の新築助成では、このふたつがずいぶん軽視されているように思う。

人については、家屋に住む人の利便性が軽視されてしまっている。ただし、新築には居住者本人が同意しているはずなので、大きな矛盾はまだ生じていない。いっぽう、建材の問題はすでに深刻だ。新築パブルに踊らされた結果、適当な木材が広範な地域から消えてしまったら、家を建てる技術をどのように伝えればよいのだろうか。



技巧を凝らした木製の窓（撮影・川瀬慈）